☆諸聖人（１１月１日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（ヨハネの黙示録　７章　２～４、９～１４節）

　わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、 太陽の出る方角から上って来るのを見た。 この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけて、 こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、 大地も海も木も損なってはならない。」わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。 それは十四万四千人で、 イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた。
　この後、わたしが見ていると、 見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、 だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、 手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。
「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、 小羊とのものである。」
また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、 玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、こう言った。
「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン。」
　すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、 長老はまた、わたしに言った。
「彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。

第二朗読（ヨハネの手紙Ⅰ　３章１～３節）

　愛する皆さん、御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、 事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです。 愛する者たち、 わたしたちは、今既に神の子ですが、 自分がどのようになるかは、

まだ示されていません。 しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。 なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。 御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。

福音朗読　（マタイよる福音書　５章　１～１２ａ節）

そのとき、イエスはこの群衆を見て、山に登られた。 腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。 そこで、イエスは口を開き、教えられた。
心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
わたしのためにののしられ、迫害され、 身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、 あなたがたは幸いである。
喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

お元気でいらっしゃいますか。ここ数日はいい天気が続いていますね。イチョウの葉も黄色く色づき、柿の葉も黄色や赤などの不思議な色が付き始め、自然の芸術を感じます。さて今日は諸聖人祭です。有名で模範的な聖人は年間を通じて記念日がありますが、人には知られてはいないが、神の身許において幸いを受けている非常にたくさんの方がおられます。その方々を記念し讃えるとともに、この世にいる私たちがいつの日か神の

身許に共に集うことができるように助けを願う日であります。神は正しく生きる人々をだれ一人として忘れることはなさらない方です。この世における苦しみ悲しみ、悲惨、孤独があっても私たちは神の前に何一つ忘れられていないことを思い起こしましょう。
それでは今日の聖書の朗読を考えてみましょう

第一朗読　（ヨハネの黙示録　７章　２～４、９～１４節）

ヨハネによる黙示録は当時の信徒の方々に神の国が到来するという希望を持たせる意味で書かれたといわれています。「額に刻印を押された人々の数は・・十四万四千人・・」。また「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった・・」。すなわち、地球上のあらゆる土地、あらゆる時代の人々が神のみ国に集うのだと宣言しているのです。黙示録が書かれた当時はキリスト教とユダヤ教がまだ拮抗していた時なのでしょう。神の国は誰にも開かれているのだとヨハネは告げているのです。そのような信仰のもとにキリスト教は当時のローマ社会に広がってゆくのです。

第二朗読（ヨハネの手紙Ⅰ　３章１～３節）

「私たちは・・自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似たものになるということを知っています」。
神のみ国では「御子をありのまま見る」のです。天の御国に行った人たち、つまり諸聖人たちはキリストの顔をありのままに見るのです。このような姿こそ、このような光景こそ父なる神が望んでおられることなのですとヨハネは言っています。御父は子であるイエス・キリストを愛しておられるように神のみ国で私たちを御子同様に愛してくださると言っているのです。私たちはこの言葉に信頼を置いて日々を生きていきましょう。

福音朗読　（マタイよる福音書　５章　１～１２ａ節）

山上の説教と呼ばれる冒頭の部分です。イエスは私たちにとって何が大切であるかを示されます。当時も今も権力や財産が幅を聞かせていますが、神の国に入るには必要ないばかりか妨げになるものです。イエスが言われることは今も昔も人は無視しがちですが、とても大切なことなのです。ここでは全部を解説することはできませんがいくつかを見てみましょう。

第一に述べられていることは「心の貧しい人々は、幸いである」という言葉です。「心の貧しい」とはどういうことでしょうか。「心が貧弱な」とかいうことではなく、自分のことではなく他の人のために場所があること、神様のための場所が空いている心のことではないでしょうか。または私たちの心が神様に飢えていることではないでしょうか。この言葉に代表される他の言葉は一般に幸いと言われるものからほど遠いものです。しかしイエスははっきりと「幸い」と仰っています。他の聖書の訳では「なんと幸いなことか！」となっています。驚きをもって言われているのです。この言葉に励まされて多くの人が、黙示録によれば十四万四千人という表現の実に多くの数えきれない人々が神の国に連なる刻印を額に受け続けているのです。教会から認定された人だけが聖人ではないのです。名も知られずに生涯をイエスに倣い、至福八端の教えを実践していかれた方々がおられるのです。

また今日の祝いはその聖人がたを讃えるだけでなく、聖人がたの祈りによって私たちも神のみ国に連なるものになれるように祈る日でもあるのです。聖トマス・アクイナスの妹がある日兄に向かい「聖人になるにはどうしたらよいのですか」と尋ねた。聖トマスは簡単に「望みさえすればそれでよい」と答えたそうです。また、聖アウグスチヌスは自分を励まして、「聖人や聖女は人間であって、私も人間である。あの人たちにできたことが、どうして私にできないことがあろうか」と言っていたそうです。

１１月２日は「死者の日」になっています。亡くなられた方々のためにミサをお捧げしますので心を合わせてお祈りください。亡くなられた方が信者でない方でも結構ですので心を合わせて祈りましょう。

「憐れみ深い神よ、亡くなられた方の生涯を憐れみ受け止めてくださり、
その罪を赦し、御国に導いてください。私たちの主イエス・キリストによって。
アーメン」

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光